Ⅱサムエル５章「主が王として立てる」

生けるまことの神、主は恵みによって私たちを選び、ご自身の民としてくださいました。そして、主の民の歩みを通して、ご自身の栄光を表されます。ご自身の計画を実現なさり、主の民とともにおられ、堅く立ててくださり、主の民にみこころを示し、約束してくださいます。

全イスラエルを一つにまとめて、ダビデを王として立てようとしたアブネルがいなくなり、その計画は頓挫してしまったようです。4 章の終わりから 5 章の初めまでの間にはしばらく期間があったと思われます。しかし、やがてイスラエルの全部族はダビデを王に立てようとして動き始めました。

１．主はご計画を実現なさる（：1〜5）

まず全部族からの使者がダビデのもとに来て、ダビデに王となるように求め、その理由を語ります。

「ご覧ください。私たちはあなたの骨肉です」。ユダ部族とそれ以外の部族とに二つに分かれて戦いがあったけれども、自分たちは一つの民であり、ダビデの親類だと言っています。

「これまで、サウルが私たちの王であったときでさえ、イスラエルを動かしていたのはあなたでした」と言います。サウルの軍勢を指揮して敵と戦っていたときのダビデの実績を認めています。

「主はあなたに言われました。『あなたがわたしの民イスラエルを牧し、あなたがイスラエルの君主となる』と」。何よりも、主がダビデをイスラエルの王として選んだのであり、主のみこころであると言っています。

イスラエルの全部族からこのように求められて、ダビデが拒む理由はありません。その後で「イスラエルの全長老」たちがやって来て、契約が結ばれます。イスラエルの代表者として彼らはダビデに油を注ぎました。神、主がダビデをイスラエルの王として立てたことを表しました。

こうしてダビデは全イスラエルの王となりました。サムエルによって油を注がれてからこれまで、ダビデは様々なことを経験し、多くの苦難の中を通ってきました。主の選びとみこころが示されていたものの、本当に実現するのだろうかと思われる状況もありました。しかし、主の計画は確かに実現されたのです。

また、サウルが死んだ後、アブネルやヨアブなどの人の考えから出た行動が続いていました。その間、ダビデは決して王となるために自ら画策することはありませんでした。主のみこころがなることだけを待っていたことがうかがえます。

このような主のみこころに対する従順と、主のなさることを待つ信仰の態度を私たちも持つようにと教えられます。主のご計画は必ず成就するのです。それがいつ、どのように成就するのかは私たちには分かりません。私たちは結果がすぐに出ることを願います。特に今の時代、私たちを取り巻く便利な環境は「待つ」ことをますます難しくしています。しかし、主のみわざを待つことは信仰者にとって、一つの賜物であり恵みであると言えるでしょう。自分の願いを成し遂げようと性急に行動するのではなく、主のみこころがなることを待ち望む信仰を持っていたいと願います。

２．ともにおられ、堅く立ててくださる（：6〜16）

イスラエルの王となったダビデは、王としての働きを一つ一つ進めていきます。まず、王の住まう場所、王国の都となる町を新たに定めます。ダビデが定めた場所はエルサレムです。そこにはエブス人が住んでいます。エルサレムは「シオンの要害」とも呼ばれ、難攻不落の要害でした。ヨシュアがカナンの地を征服した時も、シオンの要害を攻め落とすことはできず、エブス人を追い払うことはできませんでした。

そのような町でしたので、その町を勝ち取り、エブス人を討つなら、イスラエルの新しい王の新しい都と定めるのにふさわしい象徴的な意味がありました。また地理的にも、ユダ部族の中心地のヘブロンよりも、エルサレムのほうが全イスラエルの都とするのに適していました。

それでダビデと部下たちはエルサレムを攻めます。それに対してエブス人はダビデに「おまえは、ここに攻めて来ることなどできない。目の見えない者どもや足の萎えた者どもでさえも、おまえを追い出せる」と言い、健常者の守備兵は必要ないと言うほどに自分たちの要害の堅固さを誇っていました。

しかし、ダビデはそのシオンの要害を攻め取ります。8 節。ダビデは攻撃を命じる際に、エブス人が言ったことばを用いて、彼らの守備隊のことを皮肉を込めて「目の見えない者どもや足の萎えた者ども」と呼んでいま

す。高慢になっているエブス人のことを指しているのです。そしてダビデは、町の住民のために作られていた「水汲みの地下道」を通って町に侵入し、攻め取る作戦を立てて、命じました。その結果、ダビデはシオンの要害を攻め取ることができました。そして、この要害に住んで、さらに城壁を一周築いて、「ダビデの町」と呼びました。このエルサレムが新しくイスラエルの中心地となります。

この勝利を通しても、主がダビデとともにおられることが明らかにされました。10 節。イスラエルの神、主は「万軍の神」です。この世よりも遥かに優った知恵と力を持つお方がともにいてくださるので、ダビデと主の民は勝利することができるのです。

また、ダビデは、ツロの王ヒラムの協力を得て、エルサレムに王宮を建てました。

12 節。主がダビデとともにおられ、イスラエルの王として堅く立てていることを、人々も、ダビデ自身も確信して、感謝していたということです。ダビデは、主の民のために主が自分を堅く立てていること知っていました。決して自分を誇ってはいませんでした。

また、その後には、ダビデがエルサレムに来てから、側女や妻たちを迎え、子どもたちが生まれたことがまとめて記されています。このようにさらに妻や側女を持ったことも恐らく、全イスラエルの中にダビデと姻戚関係や友好関係を持つ人々が増えていき、ダビデの王権の安定につながる一つの要因だったのでしょう。

しかし、このことは人間的な考えであり、多くの妻や側女を持つことは主のみこころではないので、一時的に許容されていたとしても、それはやがて家族の苦難と崩壊へとつながってしまうことになります。

同じように主が選んで立てた一人ひとりと、主はともにおられます。それは主の民、教会が高められるためです。それが明らかにされるような歩みへと、私たちが導かれるようにと願います。主がともにいてくださること、主がご自身の民のために、私たちの歩みを確かなものとしてくださることを感謝して、証ししていきたいのです。

３．みこころを示し、約束してくださる（：17〜25）

17 節からはペリシテ人との戦いのことが記されています。ダビデと部下たちが一時期ペリシテのガテの王のもとに身を寄せていたこともあり、ペリシテ人はこの時まではダビデがある程度は自分たちに従う者であると考えていたかもしれません。しかし、ダビデが全イスラエルの王となり、エルサレムを占領すると、ペリシテ人はダビデが脅威であることを悟りました。そして、早いうちに叩いておこうと考えたのでしょう。

ペリシテ人は西から谷に沿ってエルサレムのほうへと上って来ました。レファイムの谷間はエルサレムから南西に 10 キロほどの所と考えられています。イスラエルの王となったダビデの最初の試練と言えるでしょう。イスラエルの王としてこの戦いに勝利することが、ダビデの王権をさらに確固なものにすることになります。

戦いに際して、ダビデは主に伺います。19 節。ダビデが主に伺うと、主が明らかに答えてくださいました。そして、「わたしは必ず…渡す」と言われます。これは原語では強調した表現になっています。

その主のことばに従って、約束に信頼して、ダビデは攻め上り、勝利しました。そして、「主は…私の前で私の敵を破られた」と言い、主が与えてくださった勝利であるとダビデは主のみわざをたたえたのです。

一度破れたペリシテ人ですが、再び同じレファイムの谷間に攻め上って来ました。この時もダビデは主に伺います。23〜24 節。今度は主は、前回と同じように正面から攻め上るのではなく、うしろに回り込むようにと教えてくださいます。そして、「バルサム樹の茂みの前から」、また「茂みの上で行進の音が聞こえたら」と、攻め込む場所とタイミングも教えてくださいました。さらに、「そのとき主はすでに、ペリシテ人の陣営を討つために、あなたより先に出ている」と約束してくださるのです。このように主の答えは行き届いたものでした。そして、力強い約束と励ましでした。ダビデは主が命じられたとおりに従い、今度も勝利しました。

ダビデにお応えになった主は、私たちにもみこころを示してくださいます。主に伺う方法や主の答えが与えられる方法は決まっているわけではありません。しかし、私たちが主に伺うなら、主は確かに私たちにみこころを示してくださいます。確信を与えてくださいます。励ましを与えてくださいます。そこに聖霊が働かれるのです。そして、主のことばに従うなら、主がすでに先に出ていて勝利を与えてくださるのです。その主を信頼していたいと願います。